

敗戦後の日本人を規定した「戦後思想」とはいかなるものだったのか。綿密にして体系的、丹念にしてダイナミックにその本質に迫った、思想史分野における近年最も刮目すべき作品である。戦後思想における言葉の持つ意味を確認するうえで避けて通れぬ文献になっている。

「戦後思想とは戦争体験の思想化である」。このテーゼを太い軸に据えて、「民主」や「愛国」「民族」「近代」などの言語の意味と評価がどのように変容したかを検証していく。一九五五年以前の「第一の戦後」では、社会変革のための革新の言葉だった「愛国」や「民族」、

## 刮目すべき戦後思想史



新曜社  
6300円

# 〈民主〉と〈愛国〉

小熊英二著

さらには「明治」に対する評価も、五五年以後の「第二の戦後」では保守の側に回収されていく。戦争体験が風化する（こと）によって、「民主」と「愛国」の共存関係は崩壊するのである。

戦後思想にとって、それほど戦争体験が深く刻印されていたということであり、それゆえの限界も露わになっていく。「戦争体験を持たない世代に共有されうる言葉を創れなかった」のだ。言語の持つ意味が時代や世代を抜きに考えられないことを、戦後思想を丹念に腑分けすることによって私たちに教えてくれる。戦中の愛国心教育と総力戦が戦後改革を促し、急進的な戦後民主主義も総力戦の遺産から出発した、との指摘も重要である。

千々近い本書の魅力の一つは、こうした作業を、丸山真男や大塚久雄、竹内好、吉本隆明、江藤淳らの思想を徹底的に読み込むことよって行っていることだ。それ自体が見事な丸山論や吉本論になっている。

あえて不満を言えば、保守の思想がいとも簡単に一刀両断され、基本的に左派知識人の思想史になっていることである。先進国で例を見ない自民党一党支配と高度成長はなぜ可能だったのか。その背後にある日本人の心性とは何だったのか。十分解明されていないうらみが残る。

◇おぐま・えいじ 一九六二年、東京生まれ。慶応大学助教授。著書に『八日本人の境界』『単一民族神話の起源』（いずれも新曜社）。